俺様ルール

福寺なつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺様ルール

【Ｎコード】
Ｎ８６７４Ｆ

【作者名】
福寺なつ

【あらすじ】
テニプリ（樺跡）シリアス。少しだけギャグ気味です。「何かしら（抱きつく系でも何か小さな事でも）行動を跡部さんに対して起こした樺地さんのお話」

（前書き）

これはサイト「Ｂａｎｃａ」に載せたものです。

「何かしら（抱きつく系でも何か小さな事でも）行動を跡部さんに対して起こした樺地さんのお話」

放課後の氷帝学園は、ざわめきで満ちていた。
さんざめく部活動時の声、騒音、授業中とは違う活気に満ちた空間。
「……」
廊下の端っこで、滝萩之介は珍しい光景を目撃していた。
彼は少し考え込んだ後、この「楽しみ」を広げようと思い立ち教室に駆け戻った。
「跡部、樺地が、お……」
「何だ！樺地がどうした！！」
部活がある時であろうがなかろうが大変樺地思いな跡部は、テニスで鍛え上げた反射神経を余すところなく駆使し滝を振り返った。
「……やっぱり、内緒にしとこうかな」
1回正レギュラーの座から落ちている滝は、呆れた様子で独り呟いた。
「アーン？」
跡部の面相が険しくなる。話しかけておきながら思わせぶりに中断する滝の思惑に苛立っているのだ。
「だって不思議な光景なんだよ、樺地が日吉と手をつな……」
話を再開させた滝の真横を、風のように跡部が通り過ぎた。
滝の髪が乱れ、彼はその風は風でも台風のような荒々しさに目を丸くした。
「まだ、話は途中なのに。やるねー」
滝は面白そうにクスッと笑うと、先程まで立っていた廊下の窓辺へ

戻っていった。

窓のそばには先客が居た。

「何だ？あれ……。宗教か何かか？」

「怪しい儀式に見えんこともないけど、あの3人で何、祈るんや？」

祈りと言われ滝は、ぽつりと呟いた。

「全国制覇だったりして」

「滝！」

赤い髪のサーブ&ボレーヤーとメガネのラブロマンス系オールラウンダーが、滝を振り返った。

「あ、跡部だ」

向日が指差した通り、窓の下を跡部がゴオオオオオオォオオオオとい う効果音と共に歩いていった。

「跡部が樺地に何や質問してんで」

忍足が実況中継を始める。

「俺がチクったからね、日吉と鳳と樺地で木の周りで手を繋いでて面白い、って」

くすくすと笑いながら言う滝に、忍足と向日は同時に、

「鬼」

と評した。

事の始まりは、大変くだらない話から始まる。

「木の周りをさー、何人かで手を繋いで幹の太さを測る、っていうのを」

言い出したのは鳳だった。

「……」

くだらないと返事もしない日吉と相槌を打つタイミングを失った樺地しか、その時いなかったのが問題だった。

相手にされずムカッときた鳳は、学校の木を何人かで手を繋いで幹

の太さを測りたいと言い出した。
言うが早いか、鳳はガッと樺地と日吉の手をつかんで、木のそばに到着。
「さ、やってみよう」
と促し、3人は仲良く手を繋いで木の円周に沿うたのであった。

そんなわけの分からない場面を目撃したのが、滝。
わけの分からなさに樺地が噛んでいるので登場したのが跡部だった。
跡部が鬼のように歩いてくるのを見て、鳳と日吉は素早く顔を見合わせた。
跡部はラケットを持っていないし、ここにテニスボールもないが、破滅へのロンドが開始されようとしているのは火を見るよりもあきらかだった。
ロンドに付き合っている暇はない日吉と、破滅とは関わりたくない鳳は一目散に逃げ出そうとしたが、跡部にとっては樺地と手を繋いでいたという罪は重く等しいという判決だった。

「わけがわからない」
事の始まりを言い出した鳳は、跡部の怒りの理由を知り眩暈がした。
手を繋いだから、とは。
樺地は深窓の令嬢なのか、触れることも叶わぬ保護動物なのか、火の鳥か。
鳳の眩暈に関しては、日吉もこれまた一言一句同意であった。
樺地は深窓の令嬢なのか、触れることも叶わぬ保護動物なのか、火の鳥か、そもそも跡部の干渉する意味が分からないと日吉は訴えた。
はははははは、と跡部は日吉の訴えを高らかに笑い飛ばし、
「俺様以外が樺地と手を繋いだりして良いと思ってんのか、アーン？」
と言い出したので、日吉は呆れて、

「良いんじゃないんですか、下克上だ！」
と言い返したのだった。
その瞬間、破滅とも絶望とも関わりたくない鳳は急いでその場から逃げようとしたのだが。
ロンドもプレリュードにも付き合っている暇はない日吉は、しっかりと鳳の逃げ道に立ち塞がり、３対１の姿勢を崩さなかったのであった。

「さすが、跡部。言ってることがメチャメチャ」
一部始終を廊下で聞いていた向日は、傍聴の感想を述べた。
「フツーに考えて、日吉の方が正論なんやけどな」
忍足は空を眺めながら言った。今日も天気は良く、木立ちの影もくっきりと地面にうつっている。
絶好のテニス日和だ。
「正論なんて、それぞれのルールで違うでしょ」
滝は、のんびりと窓の下を眺めた。

跡部のルールは。
「結構、キビシイよな。俺様の」
向日は指折り数え始める。
「俺様による」
続きを引き取るのは忍足。
「俺様の為の、ルール」
絞めくくる滝とてルールの全容は知らない。
彼ら部員達が知っているのは、跡部がテニスに厳しいこと、強いこと、そして少しと言っていいのかとにかく目立つこと。

だけど、そのルールを１番よく知っているのは樺地であるだろうこと、は部員全員が知っていた。

チャイムが鳴る。
向日も忍足も急いで教室に戻り荷物を持つと学校を出て行く。
滝も自宅へと足を向ける。
人民の人民による人民の為の政治、だけど、下克上も可能なのか、
それは日吉次第だと3年生たちは思ったのだった。

一方、氷帝テニス部の未来に向けて、着々と進んでいる2年生の3人なのであるが。
逃亡希望の鳳と対決希望の日吉の後ろから、樺地が跡部の前にやって来て、さっき木を抱いていたように跡部を抱きしめたのには、その場に居た下克上も一球入魂も俺様の美技に酔いなも絶句した。
それは何のメッセージなのか。
各々の胸の内を知るよしもなく樺地は、
「ウス、１４年分です」
と跡部の年輪を告げたのだった。

１３歳３人分が手と手で囲んだ木の円周に比べ、跡部景吾１４歳は樺地ひとりで囲うことが出来なくもないのだった。
跡部は木ではないから、円形状に成長するわけではないが。
それでも、この木１本に比べても人は小さき存在なのだと告げられているように思えたので、跡部は静かに樺地の手を下ろさせた。

「行くぞ、樺地」
「ウス」
何事もなかったかのように跡部は樺地と共に、下克上たちの前から去って行った。
日吉は馬鹿馬鹿しい試みの根源である、木を見上げた。
木漏れ日は美しく、ふと横を見ると問題の根源である１８５ｃｍサーブ＆ボレーヤーが、空笑いをしていた。
「何がおかしい」

日吉の問いに鳳は、１４年分の抱擁、に聞こえて、と小さな声で答えた。

あ、と日吉も呟く。
そう聞こえたであろう、普段ならば。
だが、日吉と鳳にはそうは聞こえなかったのである。
跡部が来る前に、彼らは木の年輪の話をしていた。
３人分で１周って事は何年分なんだろーねーという会話の流れで、
樺地は１４年分と跡部を評したのだ。
だが、突然の抱擁と１４年分とだけ告げられれば、それは……。

「来年は１５年分か」
日吉は積み重ねられていく時の重みを予感する。
減りはしない、増え行くばかり。だけど跡部の俺様ルールは来年、
高等部なのであるから、時の移ろいも悪くない。
下克上、万歳。

その頃、数分前まで台風の中を歩いているかのように足早だった跡部であったが、今は雲の上を歩いているかのようだった。
ふわふわとした足取りと言おうか、真っ直ぐは歩いているものの本人の心の内は、頼りない吹けば飛ぶような気の抜けたものであった。

最初、滝に告げられ廊下の窓越しに、樺地を含む2年生で木の周りに立っているのを見た時は何事かと思ったものである。
聞けば鳳の話はあいまいであったし日吉は跡部の干渉を拒むという論点のすり替えを行ってきた。
跡部とて鳳や日吉への干渉は好まない。
だが、樺地が木の表面に腕を沿うているのが、跡部には気に触ったのである。
木という自然を通して、庭に居る樺地が、校舎内に居る跡部とは断

絶された世界に居るような不思議な気がしたのである。
手が届かないような気がした。
そう跡部は思った。
一瞬の、それは恐れだったのかもしれない。
近しいと思っていた者と実はこんなにも離れていると思い知らされる、どうしようもない悲しみと不安が跡部を襲った。
俺様の俺様による俺様の為のルールに、それは触れた。
警告ゾーンだった。

だけれど、そのどうしようもない悲しみと不安を癒やしてくれるのも、樺地だった。
空気を遮るような抱擁、おのれの少し上で感じる他者の息遣い、側に居るという安心感。
１４年分と言った、その刹那さ。
その腕と胴で囲えるこの体で、跡部は跡部なりに夢を見させてやりたかった。

全国大会。

チャンスなんて、あるようでないんだから。
テニスをしてると身にしみる。
風がボールを邪魔する、何かが時に場を狂わせる、それはみずからのプレッシャーの時もある、自滅。
だからこそ勝利は輝かしく、得難いのだ。

また跡部も樺地もテニスも続いていく。
来年は高等部、来年は3年生、来年は……。
来年は１５年分と言わせてやる、必ずと跡部は勝手に決定したのだった。

俺様ルールで。

（終わり）

（後書き）

２００６年０６月３０日　２３：３０：１３に
「何かしら（抱きつく系でも何か小さな事でも）行動を跡部さんに対して起こした樺地さんのお話」
というリクエストを頂ました。
有難う御座いました。

（あとがき）
書き終わった、書き終わったと同時にタイトルが決まったよ！
それはさておき。
「何かしら（抱きつく系でも何か小さな事でも）行動を跡部さんに対して起こした樺地さんのお話」
という一文を読んで、多くの方が（送り主さんも含めて）
「樺地が跡部をハグしたりするラブラブほのぼのストーリーね！」
と思われたことでしょう。

今回は１番自分のラクなテンポで１番外側から樺地の話を書いてみました。
文字通り彼については「跡部さんに対して行動を起こした樺地」のとこしか書いていません。
それ以外は主に滝から見た後輩視点と日吉から見た同い年視点と跡部から見た跡部フィルターで構成されています。
外周として忍足・向日の後輩目線と鳳の同い年目線を置いて、今回は宍戸とジローは置きませんでした。
少々あいまいで、面白さには欠ける（ただし当サイト比においては通常こんなもんな気も……）きらいもありますが。
樺地が行動を起こした事による変化は書いたので、リクエストはク

リアかな?と思っていますが、
いかがでしょうか。

2006，8，2up

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8674f/

俺様ルール

2010年10月8日22時18分発行